

「日本NGOの他国援助の現状と課題」

国際文化交流学科4年 重村 睦美

はじめに

本論文では、NGOの他国援助活動を明らかにし、今後の日本NGOの課題を見ていく。

第一章では、NGOの概要について、第二章では、NGOの現状をJANIC（特別活動法人国際協力NGO）が発行する『NGOデータブック2006』を参考にみていく。第三章では、日本NGOの実態について、市民レベルの支援活動を行うNGO「特定非営利活動法人草の根援助運動」（以下P2）の活動内容を見ることが明らかにする。第四章では、実際にNGOが行うスタディツアーに参加し、支援先の状況や支援活動についてのべる。第五章では、数字でみたNGO、スタディツアーでみたNGO、スタッフへのインタビュー、一般市民からのアンケート結果を踏まえ、NGOの課題について述べる。最後に、NGOは「友人」となり悩んでいる人々の問題に試行錯誤取り組んで

おり、その活動を継続するため、NGOと一般市民の境界線をなくすることが重要であると主張する。

第一章 「NGO」とは—NGOの定義と歴史—

1・1 NGOの定義

「NGO (non government organization) 非政府組織」という用語は、もともと国連憲章において、政府以外の民間組織の呼称として用いられた言葉である。

現在、NGOは、非政府組織・非営利組織・市民が自立的・自発的に主導する組織・開発、人権、環境、平和などの地球的規模の問題に取り組む、国際協力・開発協力のための組織、と定義されている。本論文では、地球的規模の課題（開発・人権・平和・環境・緊急支援など）に取り組み非政府・非営利の市民組織を国際協力NGOと定義する。

1・2 日本NGOの歴史

日本のNGOのはじまりは、1938年、キリスト教の医療団が、日中戦争での日本軍侵略によって生じた被害や難民の医療活動を行うため中国に派遣されたことと言われている。その後、戦争期による約20年間の空白期間を経て、1960年代、社会問題の解決を目指し多くの市民団体が形成された。1979年から80年代後半にかけて、難民支援のためNGOが設立されるなど、NGOの数が急増。その後、「緊急支援」・「復興支援」「開発」へと活動内容が発展。その中で、南の貧困と北の豊かさの構造的な問題（南北問題）への理解が拡大するとともに、人権問題、環境問題に取り組むNGOなどが多数設立された。

1990年代、政府機関のNGO支援が活発化するなど資金に恵まれ、団体設立の動きが最も活発になった。1990年代後半になると、国際協力事業団（JICA）もNGOとの連携を強めていった。一方、NGOによるODA（政府開発援助）に対する批判も見受けられるようになり、政府や企業に対する政策提言などの活動も強化されていった。2005年の「ほっとけない世界の貧しさ」キャンペーンは、NGO、協力企業、賛同者との連携で成り立って

おり、NGOの活動範囲は拡大されつつあると言える。

第二章 NGOの現状 — 数字から見るNGO —

第一章では、歴史や社会情勢により活動のあり方が日々変化していることがわかった。

第二章では、NGOの現状についてより詳しく見ていく。一般的に、日本では「NGO」という名前は知っていても、具体的な活動内容を知る人は少ない。2009年10月、20〜30代の65人を対象に行ったNGOに関するアンケートによると、「NGOの名前を知っている」と答えた人が97%、そのうち「NGOの活動内容を知っている」と答えた人は41%となっている。

約半数以下の人々が「NGO」という言葉は聞いたことがあるにも関わらず、NGOの活動内容までは認知していないことになる。実際、アンケート回答者からは、「名前とイメージはあるが、具体的なイメージがない」、「実際NGOについて何も知らない」という声が上がっている。そこで以下では、JANICが発行する『NGOデータブック2006』を参考に見ていく。

2・1 活動地域

NGOの活動地域は、約70%がアジアである。

フィリピンが圧倒的に多く、カンボジア・ネパールが続く。2002年に独立を果たした東ティモール1、2001年のアメリカ同時多発テロ後、社会的に混乱したアフガニスタン2に対する支援を行う団体も増えている。

2・2 活動内容

2006年時点では、「教育」「保健医療」「農村開発・農業」「職業訓練」の分野がNGO活動の盛んな分野である。「植林・森林の保全」「自然災害」「環境教育」を合わせると、「環境」もNGOの重要分野であるといえる。最近の傾向として「生活向上」と「環境保全」が中心的なテーマであることがわかる。

『NGOデータブック2006』をもとに、事業形態を分類すると、①「資金支援」②「南(途上国)の人々が必要とする資金を提供」③「物資供給」④「人材派遣」⑤「緊急支援」⑥「調査研究」である。その他の形態は「スタディーツアー」の実施や「現地スタッフの育成」である。最も多いのは途上国に対する「資金援助」であり、「人材派遣」も盛んである。

2・3 財政

上記のような活動を行うため、NGOは何処から資金を得、どのように分配しているのだろうか。収入の内訳を見ると、41・8%が

寄付金収入であり、会費収入が7・8%、助成金は11・2%である。NGOは、主に寄付金と会費収入の内部資金で活動費をまかなっていることがわかる。また、人件費に関しては、33%もの人々が無給で働いている。

2・4 スタッフ

NGOのスタッフは、その半数近くを企業従事者が占めており、次いで学生、主婦と続いている。これは、NGOスタッフ達が「支援する」という上から目線の意識を持って活動しているのではなく、友人対友人としてNGO活動を行っているからではないだろうか。

コンゴとベトナムで援助活動を行い、スタッフの多くがサラリーマンであるHINT(特定非営利法人ヒューメイン・インターナショナル・ネットワーク)の人に支援先の人との関係を尋ねたら、「家族みたいなもの。15年前に出会っているから、私と同年くらいなんだよ。」と言っていた。HINTスタッフは、月一回新宿の飲み屋で自分たちの活動について話し合う機会を設けている。この時間は、彼らにとって大変有意義な時間のようだ。「月一回集まって、また今月も頑張ろう、って元気になるんだよ」と言っていた。NGO活動は、私たち日本人までも元気づけているのだ。

また、フィリピンで教育支援を行っている21世紀協会で、20年間NGO活動を続けているスタッフにNGO活動を続ける理由を尋ねたら、「喜びがあるから。子供たちが育っていくのを見るのが嬉しい。もともと教育が不要な所に根付かせるから脱落者も多いが、一人二人育っていくのを見ると嬉しい。元小学生が教育支援を受けて今は子供たちに教えている。そうやって、育つて、育てる側になることが一番の目的」と言っていた。

NGO活動に携わる人々は、みな顔が生き生きとしている。それは、NGO活動を通し、多くの人々に出会い、長い年月を経て強固な信頼関係を築いているからではないだろうか。

第三章 NGOの実態 —「草の根援助運動」—

第二章では、『NGOデータブック2006』の数字をもとに、NGOの現状を全体的に把握することができた。しかし、数字だけではNGO活動の実態を見えてこない。本章ではこの課題を検討するために、具体例として、コミュニティレベルの国際NGO・P2を取り上げ、数字からは見えないNGOの実態に迫る。

3・1 歴史

P2は、1989年、横浜で開催されたOD

Aを問う国際シンポジウムに参加した市民が1990年に設立した開発協力NGOである。日本のODAを被援助国の住民の要求にこたえるものに改革・改善し、世界中の人々との共生社会を実現しようと活動を開始した。「草の根援助運動憲章」には、NGO活動を世界の不平等、不正義を正すための社会運動と位置付け、アジア各国の自立・自助の運動から学び、自分たちの生活を見直しながら、日本とアジア・太平洋・第三世界との関係を変えていくと明記されている。

3・2 活動地域と活動内容・活動形態

1989年から約20年間、フィリピン、インドネシア、インドを援助している。主な活動内容は「農村開発」である。しかし、「農村開発」と一口にいつても、対フィリピン

支援では森林の保全・植林、自然災害に対する援助を行うなど、多岐の分野に渡っている。その理由は、貧困問題には様々な問題が絡み合っており、ある特定の分野への援助だけでは解決できないからである。このように、一つのNGOの「支援活動内容」といつても、貧困問題はありとあらゆる分野が絡んでいるため、複数の活動分野が存在することになる。また、P2の主な活動形態は、①インド、インドネシア、

フィリピンの現地NGOと共に進める持続可能な開発に対する資金協力②政府・自治体、国際機関への提言活動③開発教育（スタディーツアー、学習会、ニュースレター発行などである。最近ではフィリピンのマニラ湾の環境保全に対して環境の専門家を派遣する「人材派遣」、自然災害に対する「緊急支援」など、問題発生に対し臨機応変に事業を展開している。

3・4 草の根援助運動のフィリピン援助の特徴
フィリピン援助を例に見てみると、P2の活動の特徴は主に二点ある。

一点目は、フィリピンのNGOであるPRRMをパートナーに迎え、現地団体など複数の団体と連携をとりながら活動を展開している点である。PRRMとは、1952年の創立の総合的農漁村開発を支援するフィリピンの代表的なNGOである。P2とPRRMは、パートナーという対等な関係であり、開発の主体はあくまでもPRRMである。現地にパートナーを持つことの利点として、①現地住民のニーズが反映された活動に協力できること②日本人市民にフィリピンの現状を直接提示できることが挙げられる。

二点目の特徴は援助の「継続性」である。以前、PRRMにとってP2は小さなパートナーに過

ぎず、ヨーロッパの大型NGOや世界保健機構などの支援を受けていた。しかし、P2は一定期間を目安に支援をストップする海外NGOとは異なり、現在も資金援助や、PRRMスタッフとともに日本でフィリピンの現状を伝える活動を行っている。

第四章 スタディーツアー — フィリピン編 —

2009年の夏、私はP2の活動内容の一つであるフィリピンでの「スタディーツアー」に参加した。以下では、スタディーツアーの内容と、P2とPRRMのスタッフのフィリピンの貧困問題に対する取り組みを詳しく述べる。

2009年8月17日〜23日

一日目

- ・ P2スタッフの小野行雄氏とともにマニラ空港に到着
- ・ マニラ空港からタクシーで、PRRM事務所を訪問、P2スタッフ古澤めい氏と合流
- ・ 事務所施設を見学・食事会
- ・ PRRMスタッフ、住民組織スタッフ、P2スタッフらと夕食。PRRM事務所の食堂では「マクロビオティック療法」として、事務所の屋上にあるココナッツの殻や廃品を利用した畑で収穫した野菜を使用しているとの

こと。

二日目

- ・ PRRM事務所にて共同プロジェクト「マニラ湾プロジェクト」についての会議
- 参加者は、小野氏、古澤氏、PRRMスタッフのアテネネ氏、エボイ氏、ジュン氏。内容は、プロジェクト実施地近隣のゴミ集積場建設について。プロジェクトの次世代スタッフの育成が今後の課題であるとのこと。
- ・ バストとトライシクル¹⁾を利用し カプニタン村へ移動
- 村の建物は小さな家や店など全体的に低い。道路は舗装されていない。小屋のような家が一本道に軒を連ね、すぐ両脇には海と養殖池がある。台風がきたら海の波に飲み込まれてしまいうるほど、家と海の距離が近い。小野氏によると、台風や豪雨の時期、村の人は内陸に住んでいる人の家に避難するとのこと。
- ・ カプニタン村の住民組織メンバーと合流
- ・ マニラ湾プロジェクトの一環であるアマモ。視察に同行
- 前回は視察に来た小野氏の話によると、以前



よりアマモ場が縮小しているという。定期的に視察にきているため、環境破壊の過程を見ることが出来る。アマモの減少は、環境悪化の進行を表している。

・ 宿泊先であるノエル氏¹⁰⁾の家へ帰宅

小野氏によると、ノエル氏は、様々な事業を行ってきたため村の中では収入が多い方という。フィリピンでより良い暮らしを送るためには、ビジネス感覚を持ち様々な事業を展開していく必要がある。ノエル氏の場合、漁業で得た資金を元手にバイクを購入し、トライシクルとして村人にレンタルするなど、様々なビジネスを手がけたという。ノエル氏の奥さんも、自宅に村の主婦を集め、化粧品を販売するなど積極的にビジネスを行ったという。そのため、ノエル氏の家は私たちが泊まれるほど広い。トイレは手動であるが、洗濯機やテレビなど様々な電化製品がある。



三 日 目

・オリオン市庁舎にてオリオン市長とのミーティングに同行

内容は、P R R Mの次世代を担う人材育成を目的としたマルチパーパスセンターの建設について。P 2が外務省から資金をもらい、プロジェクト資金の一部を提供することになっている。今回は、外務省にプロジェクト資金を申請する企画書に必要な事項を話し合ううだ。

・サンタエレーナに到着

サンタエレーナは水上スラムである。村に行くには、隙間だらけの橋を渡らなければならない。これが海に浮かぶサンタエレーナに行く唯一の方法だ。橋の両脇にP R R Mの環境保護のプロジェクトで植林したマンダローブがある。しかし、P R R Mスタッフによると、せっかく植林しても生活のために住民によって切り倒されてしまうことが多いという。それは、住民にとっては、目の前の生活、火をおこす薪や住居の



材料を集めることの方が、環境よりも重要であるからだ。植林されたマンダローブの周りには伐採跡も多く見られる。環境の悪化は結局、住民の貧困につながり、貧困の連鎖を引き起こすことになる。

・サマツト山観光

サマツト山は、かつて日本軍がフィリピン人にひどい行為「バターン死の行進」¹²を行った場所である。サマツト山には、高さ60mの十字架が建てられている。十字架には、フィリピンの国民的英雄や、日本軍がフィリピンに上陸する姿が彫られている。十字架にはエレベーターがあり、つべんからサマツト山を一望できる。十字架からサマツト山を下ると、日本の熱帯材木輸入によりできたという禿山が見える。

四 日 目

・SCHOOL OF FISHERIESを訪問

様々な種類のマンダローブ、マンダローブの苗を見学。以前は、下の写真よりも小さな苗を植林していたが、台風で倒されてしまったため、苗を大きく育てているとのこと。

・バターン州バンガイダガツ



ト¹³を訪問・スタッフ同士近況報告

・マルチパーパスセンターの建設予定地視察に同行

・マニラにてフィリピン大学の日本人留学生3人と合流
・ナイクにあるWorld Vision「DASH」の援助で建設された研修施設に到着

五 日 目

・ナイクからジプニーでサンタメルセデスへ移動

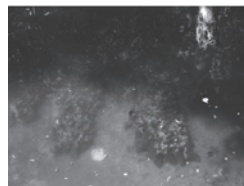
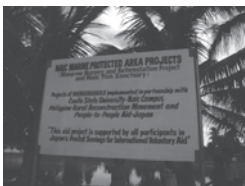
道路が未舗装舗装のため、サンタメルセデスに近づくにつれ険しい道に。

・マンダローブ植林実施地及び予定地を見学

サンタエレーナと同様、マンダローブの伐採や台風の影響によりプロジェクトは難航中。

・アマモの視察

カプニタン村で見たアマモとは違う植物と思うくらい葉がしっかりしている。小野氏が今年5月に



日本のアマモ専門家を連れてきた際、専門家たちはこのアマモの状態のよさに驚いたという。マニラ湾プロジェクトでは、この健康なアマモをカプニタン村のアマモ場に移植し、アマモの繁殖をうながすことも考えている。

カプニタン村の海に比べ、この海は水も透き通っていて生物も多様である。しかし、砂浜のところどころに空き瓶やお菓子の袋などが捨てられている。これは、最近海水浴を目的とした旅行者が増加していることが原因らしい。

・夕食後の水浴び
サンタメルセデスでは家の中に井戸が無く、外の井戸を共同で使用することになっている。草の根援助活動も以前、横浜水道局とともに井戸の設置を支援した。しかし、下水施設が整っていないため、この井戸から出る水の水質はあまりよくないという。

六日目

・バランガイ・キマランへ移動
・5月に植林した1500本のマングローブを視察
先月の台風のため、ほとんどの苗木が倒れている。住民に切り取られないよう、P2とP

RRM、住民組織は看板を作成したらしい。

・ニイノ・アキノ国際空港到着・成田空港着陸
考察・百聞は一見にしかず・

私にとつて遠い存在だったNGO。実際にどのような支援活動を行っているのか、この目で見たいと思ひ、P2のスタディーツアーに参加した。

マングローブ植林事業にアマモの調査。P2の資金援助によって立てられた海辺の小屋。報告書や写真で見えてきたものを実際に目の前にすると、以前は遠く離れていたNGOの活動がぐっと身近なものになった

久しぶりに会った友達のように再会を喜ぶPRRMのスタッフやカプニタン村の人々とP2スタッフ。今回のフィリピン訪問を通し、NGO活動の目的は友人に手を差し伸べるかのように困っている人たちの生活をよりよく改善することであると実感した。共にその国の貧困撲滅に立ち向かい、友人として人々の力になる。現地の人々との絆が根付いているのだと実感した。そのためNGOスタッフは日本市民から資金を募り、安月給や無給で日々走り回って貧困の現状を伝えている。これが日本NGOの実態ではないだろうか。

第五章 NGOの課題

上記では、NGOの概要について述べてきた。そこで明らかとなったのは、NGOには様々な課題が多くあることである。そこで本章では、今後のNGO活動の課題を検討する。

5・1 資金不足

第二章からは、資金不足がNGO活動を継続する上での課題であることが明らかになった。資金不足は、支援プロジェクト評価の不実施、NGOスタッフへの給与支払いなど、様々な面に影響を及ぼす。資金不足に陥る要因として、日本のODA削減、NGOの資金調達能力の弱さが挙げられる。

現在、NGOの資金調達に関し、多くのNGOは自ら、資金源となる事業を打ち出そうと試みている。例えば、IT技術者のスタッフが編成する「特定非営利活動かものはし」では、IT事業で収益を上げ、それを活動費に当てている。また、元国連職員がスタッフの「Glimi（ジーエルエム・インスティテュート）」は、スタッフのコンサルtant能力を販売し、収益を得ている。

しかし、事業を行うためにはこのような特殊な能力や売れる商品が必要であり、一般的なNGOが自ら資金源を開拓することは難しい。P

2では、パートナーNGOのプロジェクトの一貫で作っている農作物や化粧品などの商品を日本で販売して資金源にしようとしているが、薬事法などの貿易上の問題から実現できずにいる。資金不足を解決するため、NGOスタッフもビジネス感覚を養うことが必要だ。

5・2 活動成果の見えにくさ

NGO活動は、現地の人々の置かれている状況や天候状況など、様々な要素を考慮しなければならぬため、一般市民が活動内容を把握することは難しい。フィリピンのスタディーツアーで視察した「マングローブ植林」のように、住民による住居確保のための伐採、台風による吹き飛ばされにより、プロジェクトが難航することも多々ある。

いくら有効だと思えるプロジェクトを行っていても、いくら多額の資金を投入しても、すぐに上手くいくとは限らない。貧困を取り巻くありとあらゆる状況を考慮し、例え失敗しても長期的な視点に立ち、絶対に諦めずに活動を行っていくことが重要だ。そのためにも、実施したプロジェクトの評価を行い、市民へNGOのプロジェクトの有効性・NGOの存在意義を提示することが重要だ。

5・3 一般市民への理解

収入内訳で最も高い割合を占めている寄付金の使用に関して、NGOスタッフと寄付者との間に問題がある。一般的に、寄付者の多くは貧困問題の起こっている現地で活かしてほしいと考える。だが、実際は国内の広報活動や事務に利用したほうが、結果的に現地の人々に役立つ場合がある。現地で役立てるためには、人件費や事務費などの目に見えない資金も必要とするからだ¹⁵。寄付金の使用先などを寄付者に正確に理解してもらう必要がある。

まとめ

NGOの意義

本論文では、NGO活動の現状と課題を、データ・現地調査・インタビューを通して見てきた。そこから明らかになったのは、日本NGOは、「友人」となり悩んでいる人々の問題に取り組むため、希望をともに有していることであった。

P2事務スタッフの古澤氏にインタビューの中で、心に残った言葉がある。「私たちは何年もフィリピンのためにがんばってきた。だけど、フィリピンの現状は決してよくならない。それどころか悪くなる一方だ。でも、僕たちは、PRRMは、人々から必要とされている限り全力

を尽くす。」(PRRM代表、ガーニー氏の言葉)

この言葉に対し、「PRRMが私たちを必要とする限り、全力でサポートし続けよう。」(古澤氏の言葉)と古澤氏は心に決めたそうだ。一生懸命頑張ってもフィリピンの現状が悪くなる一方ならば、援助活動など行わなければよいと思うかもしれない。だが、誰かが行動をしなければ世界はもっと悪い方向へ進んでしまうだろう。与えられた様々な条件の中で、互いに手を取り合い、試行錯誤を繰り返しながら、援助活動に取り組むことの意義は決して小さくないはずだ。

しかし、第二章で見たように、日本NGOは決して大きなものではない。一つの団体が取り組むことができる課題は限られており、資金面でも困難が強いられている。それ故に支援に限界を感じることもあるかもしれない。また、第三章・第四章では、具体事例としてP2の活動を取り上げ、スタディーツアーに参加し、データからは見えないNGO活動を見てきた。そこから明らかとなったのは、NGOの援助活動は地域に根ざしているが故に市民にとってわかりにくいという事実である。NGOは資金不足に加え、一般市民への活動内容の見えにくさなど

様々な課題に直面しているのだ。

NGOの今後

それでは、上記の課題に対し、NGOはどう対応すればよいのだろうか。その答えは、NGOと一般市民のギャップを生めること、特にNGO活動の内容を多くの人々に正しく理解してもらうことだろう。なぜならば、データなどからはNGO活動を理解することは困難だからだ。日本NGOは一般市民への理解を得るため、国際協力イベントを開催しているにも関わらず、その参加者にはNGO関係者が多く、NGO活動に興味のない人に訴える場になっていない。「NGOのイベント」とするのではなく、一般市民にとって身近なイベントになるよう、NGOと一般市民の境界線を無くすべきではないだろうか。データではわかりにくいNGO活動を一般市民に正確に伝えることができれば、南北問題への関心も高まり、貧困の悪循環も徐々に変わるに違いない。

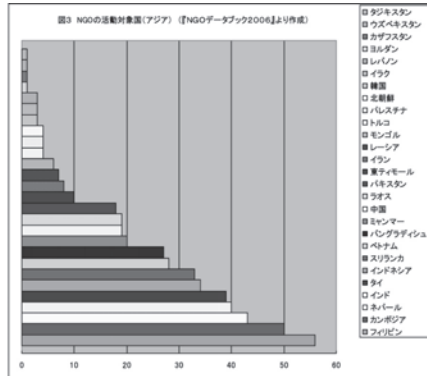
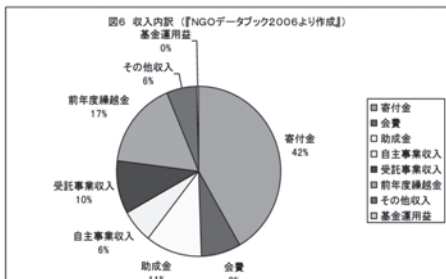
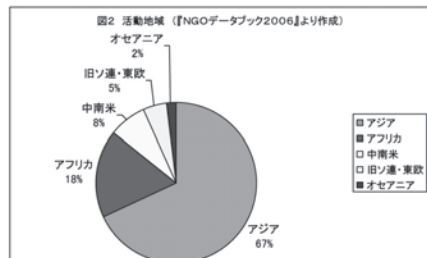
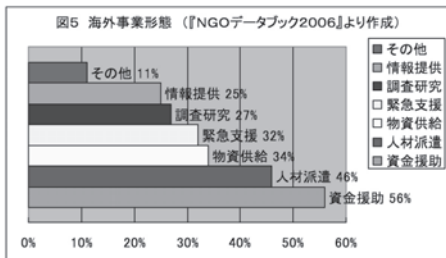
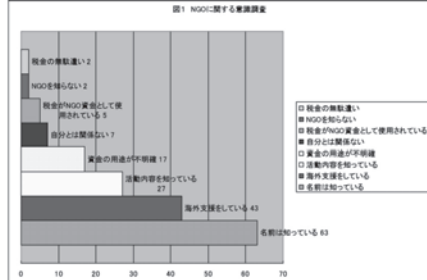
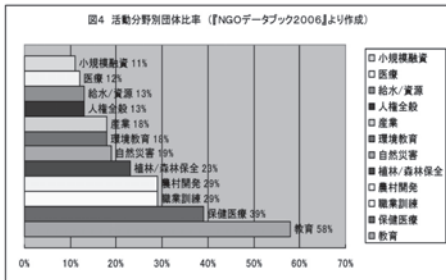
参考文献

大野拓司、寺田勇文『現代フィリピンを知るための章』（2002年、明石書店）

年 藤原書店）

小野行雄『NGO主義でいこう』（2002

功刀達郎・毛利勝彦『国際NGOが世界を変



える―地球市民社会の黎明―（2006年、東信堂）

小島延夫、諏訪勝『これでいいのか、ODA!』（1996年、三一書房）

鷹沢のり子『パターン「死の行進」を歩く』（1995年、筑摩書房）

デビッド・J・スタインバーク『フィリピンの歴史・文化・社会』（2000年、明石書店）

山田陽一『ODAとNGO社会開発と労働組合』（2000年、社団法人教育文化協会）

JANIC『NGOデータブック2006
数字で見る日本のNGO』（2007年）

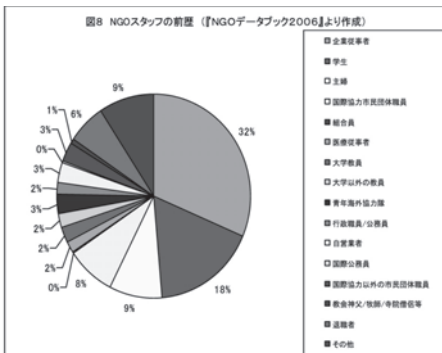
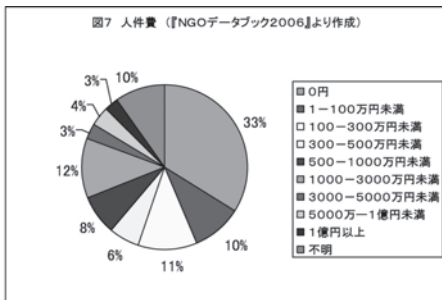
P2『報告国際シンポジウム 日本の国際協力を考える―南のNGOからの提言―』（2003年）

P2『貧困と環境問題フィリピン・マニラ・ベイプロジェクト』（2002年）

参考ホームページ
外務省フィリピン

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/philippine/s/data.html>

JANIC <http://www.janic.org>



- 1 NGOデータブック2006 24項
- 2 NGOデータブック2006 24項
- 3 2009年10月4日日比谷公園のグローバルフェスタにてインタビュー
- 4 2009年10月4日日比谷公園のグローバルフェスタにてインタビュー
- 5 マクロバイオテック療法・長寿法を説くものであり、人と生き物と環境のバランスを保ちつつ健康の根源を支えるもの。ストレス緩和と栄養バランスを大切に、正しい生活と食事から健康を維持し、体質を改善する。
- 6 マニラ湾プロジェクト・草の根援助運動とPRRMとの共同プロジェクト。
- 7 トライシクル・日本メーカーの125CCの現地生産のバイクにサイドカーをつけたもので、比較的近距离に使われる。安い乗車料金と厳しい暑さのため、近い距離でもこの乗り物を使用することが多い。
- 8 カプニタン村・海岸線に隣接している村。1960年、生活に困窮した人々が海沿いの場所に住み着いたことから始まった。住民の多くは漁師となり、小さなボートで海へ出て行き、小魚を取って生活をしている。人口増加によるマニラ湾の汚染と海資源の減少はすさまじい。
- 9 アマモ・海に生える草。アマモ場は「海のゆ

りかこ」とも呼ばれ、タコやイカ、魚の産卵所になる。小魚の住処にもなっている。

¹⁰ ノエル・エリアローズ・全国漁民組織連合代表

¹¹ マングローブ…海水の届く海岸や河川沿いに生育する植物の総称。世界中の熱帯・亜熱帯の海岸線に約80種(分類によって異なる)が生息しており、そのうちフィリピンでは47種が確認されている。マングローブは、塩分を含む海水が届く地に、唯一森を作ることができる植物。フィリピンの海岸線には主要な都市が点在しているが、台風によって海岸線が何メートルも後退することがある。また、マングローブ林は、食べることでできる魚やカニを含む様々な生き物の住処になる。マングローブは、海岸線に生きる漁民たちの暮らしを守るバリエードといえる。

(<http://www.ikawako.com/index.html>を参照)

¹² バターン死の行進…1942年、日本軍は、米比軍の降伏後、バターン半島から米比軍捕虜と市民たちを炎天下の中で行進させた。最も長い距離は約112キロであり、行進に参加させられた数は、米兵9300名、比兵6万名で、市民は約4万1000名。捕虜たちの移送にはトラックを使用する案もあったが、輸送力不足

のために徒歩で行進させた。捕虜たちは行進中、マラリアや赤痢、栄養失調で倒れたり、日本軍監視兵に殺傷されたりした。行進中に死亡・逃亡した数は、合計約2万1000名にのぼるといふ。

¹³ バンタイダガット…海の万人。違法漁船に停止を命じるマニラ湾沿岸漁民組織連合のメンバー。

¹⁴ WORLD VISION JAPAN…朝鮮戦争によって生まれた多くの孤児や、夫を亡くした女性たち、ハンセン病や結核患者に救いの手をさしおのべることから活動を始めた国際NGO。現在では、約100カ国にまで活動を展開している。

¹⁵ 2009年9月9日P2の事務所にて古澤めい氏にインタビュー